

## ◎横浜市の対応

### ① 現地の被災状況を見て

■廣瀬良一

日本中を震えあがらせ一瞬にして壊滅的な都市の破壊をもたらし、五千四百人を超える貴い命を奪った阪神・淡路大震災から早二カ月が過ぎた。「成人の日」を挟んで三連休の終わった一月十七日（火）の朝、私は、いつものように五時過ぎに起きて洗面等の簡単な身支度を済ませ、まだ薄暗い冷えきった戸外に出て愛犬との散歩に出掛けようとしたそのとき、イヤホンから聞こえていた「人生読本」の放送が突然中断され、数秒後に「地震情報」として告げられたアナウンサーの言葉が、私の耳には奇妙にひっかかるところがあった。

このときの情報では、つい先頃の「三陸はるか沖地震」の時とそれほど変わった様子もなく、震源地が淡路島付近で各地の震度を順次伝えては、それを繰り返していた。

しかし、しばらくして神戸の震度が5から6に修正されたあたりから、なんとなくあわ

ただしさが伝わってきたからだ。

時間の経過と共に情報がしだいに集まってくるにつれ、被災の様子が二次曲線を見ていくかのように甚大かつ深刻さを増してきた。ニュースで伝えられる災害情報の中で、それぞれの地名や地区名を聞くたびにかつて訪れたときの情景と想いくらべ、何という恐ろしいことが起こっているのか、まさに戦慄の連続であった。

救援要請を受けた本市消防隊と給水隊に続き、医療班の緊急派遣など本市関係職員の支援も目を追って急増し、混乱の現地で身の危険を感じながら、献身的な活躍を続けてくれた。そのことは、第二次派遣隊と交代して帰ってきた各局の第一次派遣の職員からの報告にもよく現れていたが、さらに私自身も二月四日（土）から五日（日）に、本市の各支援隊の激励を兼ねて被災地を視察した際に、被災された神戸市民や関係者の言動からそれによ

く読み取ることができた。

各支援隊の活動内容や状況及び支援活動を通じての被災地の惨状などの詳細については、本特集で個別にレポートがなされることになっているので、私は急遽訪問した神戸市災害対策本部の様子や主な被災地の概括的な状況等についてコメントをし、記録の一助としておきたい。

#### 1 神戸市災害対策本部を訪問

震災から十九日目の二月四日（土）の午後、本市水道局の給水支援隊の交代要員とともに、その拠点となっている神戸市中央区にある神戸市水道局中部センターに立ち寄り、各都市からの支援隊と協力して給水車による給水活動を続けている本市支援隊を激励の後、約三キロ離れた神戸市庁舎内に設置されている神戸市災害対策本部を訪問した。

① 現地の被災状況を見て  
② 横浜市が行った救援・復旧・復興支援の概略

- 1 神戸市災害対策本部を訪問
- 2 各支援隊の激励
- 3 被災地をこの目で見て

対策本部は、神戸市の新しいシンボルともなっている超高層新庁舎の十四階に設けられており、そこで副本部長である緒方学助役にお目にかかって丁寧に御見舞いを申し上げた。短い時間での面談ではあったが、連日の協議や対策に追われて疲労の色が濃く、市政にとっての一大事を抱える責任者の苦悩が滲み出ていて、誠に御気の毒であった。

横浜市として大都市相互の救援活動はもとより、かつて関東大震災の際に遠く神戸からも多くの救援をいただいたことへの恩返しの一つとしても、今回の災害に対し可能な支援を続ける意志を直接お伝えすると共に、高秀市長から笹山神戸市長へのメッセージをお伝えした。

今回の神戸市災害対策本部の組織は、本市同様市長が本部長、助役、収入役が副本部長となっており、各局長がそれぞれのセクション毎の対策本部の長となつて各局職員等を指揮していた。

今回の震災で、神戸市旧庁舎（八階建）の六階部分が圧壊したため、この建物を使用していた各セクションは、ほとんどの書類・事務機器等を残したまま、隣接の超高層新庁舎に移つて各局対策本部としていたが、事務室機能としてもかなり混乱状態が続いている様子であった。

今回被害を受けた神戸市の旧庁舎は、本市庁舎より二年前の昭和三十二年竣工の建物で、砂れき層に直接定着させた地下一階地上八階建の鉄骨鉄筋コンクリート造及び鉄筋コンクリート造となつている。地下一階から地上五階までの六層分は、鉄骨鉄筋コンクリート造

であるが、圧壊した六階から八階までの三層分は、鉄骨の入らない通常の鉄筋コンクリート造となつていた。今回この建物は、いみじくも構造形式の異なる六階部分で柱の座屈という異常が発生したことになる。

ちなみに本市庁舎の本館は、地盤面から約四十メートルの深さの支持層に「ウエル」と呼ばれる鉄筋コンクリート造（直径五メートル、肉厚四十五センチ）の支柱によつて支えられた地下一階地上八階建の鉄骨鉄筋コンクリート造となつており、神戸市旧庁舎のように建物途中階から構造形式を変えてはいない。

なお、市民広間部分及び市会棟は、低層建物であることもあつて、主として鉄筋コンクリート造一部鉄骨鉄筋コンクリート造となつており、基礎構造もベタ基礎で、比較的浅い地盤に支持させている。

## 2 各支援隊の激励

二月五日（日）の時点で本市支援隊として派遣されていた各職員のチームは、消防局の航空隊、救助隊、水道局（道路局）の給水・復旧隊、衛生局の医療班、環境事業局の清掃隊、下水道局の復旧調査隊、建築局の建築物応急危険度判定士チーム等約二百名（延約六百名）であつたが、そのころの現地の交通事情を考慮すると時間的制約や地理的条件から、次の六カ所を訪問激励するのが精一杯であつた。

### ① 神戸市水道局中部センター

ここは、神戸市の五つの水道事業センター

の一つで中央区、兵庫区等市の中心部を所管しており、応急給水から施設の復旧工事及び配水施設管理までを一貫して行つており、本市支援隊は給水車による運搬給水班として、他都市の支援隊と協力して連日の活躍を続けていた。

当センターは事務室や作業所のほか研修用和室、室内体育施設等も備えた立派な施設であるが、それらのスペースをフルに活用し、神戸市水道局の職員と一体となつて各支援都市の分担に沿って夜遅くまで作業を続けていた。特に応急給水に出勤した本市チームに対し、現地の女性や小学生から心のもつた感謝の手紙を何通も貰つたことで、心身の疲れを吹き飛ばしてくれたとのことであつた。

### ② 神戸市水道局西部センター

ここは、震災直後から連続して大きな火災に見舞われた長田区等を所管区域とする事業所で、被災住民の最も多いところである。

この西部センターも前記中部センター同様、応急給水、施設復旧工事及び配水施設管理までを一貫して行つており、本市支援隊は、同行した横浜市内の専門業者と協力して、復旧工事の支援を行った。日曜日の早朝にもかかわらず事務所の内外は慌ただしい雰囲気につつまれていた。本市支援隊もすっかり現地職員と一体となつて、一日の作業打ち合わせをしており、その光景はいかにも実践的で頼もしさが感じられた。

### ③ 神戸市水道局垂水センター

ここは、神戸市の西端の垂水区に属し、本

州と淡路島を經由して四国を結ぶ明石大橋建設工事の起点ともなっており、新興住宅地が多い地域となっている。

今回の地震で明石大橋の本州側橋脚が一メートル余も横にずれたとの報道もあった程に、街は建物の倒壊等の被害は少ないものの、造成地における水道、下水道、ガス管等の地下埋設物が幹線・支線を問わず随所で破損しているため、特に水道施設について、本市をはじめ各都市の支援を得て復旧工事を急いでいた。

さらに、ここのセンターの事務所自体も一部被害を受けていることもあって、支援隊はそれぞれ別々の宿舍から通うことを余儀なくされており、それだけ作業効率にも影響が出ているようである。

なお、支援隊は全員強い使命感をもって夜遅くに宿舍に帰ることが多いとのことであるが、具体的な復旧方法等で本市職員の考えと神戸市の方式との調整に若干手間取っている面も見受けられた。

#### ④ 神戸市環境局 長田事務所

家屋の倒壊によつて、これまで使っていた家庭内の家具や調度品に加え、住宅そのものも大きな廃棄物となつてしまつたことから、街角はもちろん路地のあちこちにも、おびただしい量の各種雑多なゴミが山のように積まれていた。一説によると通常神戸市内で発生する十年分のゴミが一気に発生したとのことであり、それが道路交通や復旧活動を一層阻害する結果をもたらしている。

この環境事務所でも他都市の支援隊と協力

して、ゴミ収集作業に本市環境事務局の職員と車両が配備されていたが、勝手の判らない他都市で、しかも日常取り扱っているゴミの種類に比し、はるかに雑多で危険なものまで混在している大量のゴミに挑戦しているという支援隊長の説明に、強い使命感と信頼感がかもつていた。

神戸市の現地所長及び職員からも礼儀正しく迎えられたので、私も心をこめて丁寧に激励のあいさつをしてきた。

#### ⑤ 神戸市立御蔵小学校

長田区の避難場所の一つとなつているこの小学校には、本市市民病院の医療チームが詰めており、長引く避難者の健康維持・相談等に活躍していた。

学校の室内はもとより校庭と隣接の一番町公園にも、寒空でのテント生活を送っている被災者の生活実態を、この目で直に見聞きしてきた。

本市支援の医療班の話によれば、発災当初の外科的治療の段階からしだいに内科的治療が多くなり、さらに最近では、喉や目、鼻の治療・相談が増えてきたとのことであつた。

そういえば街のあちこちで、倒壊建物の片付けや壊れかかつたビルの解体作業等がいっせいに始まり、辺り一面がホコリっぽくなつていた。加えて解体に使用する重量土木機械は道路上に据え付けられるケースが多く、あちこちで通行止めとなりこれが交通渋滞を一層助長して解体作業によるホコリと共に、街全体の大気汚染に結び付いているともいえずうであつた。

このような環境の中にあつても、私にとつて救いと思われたことは、避難者の何人かの人から逆に「ご苦労様」と声をかけられたり、狭い校舎間の空き地で明るく遊ぶ子供達の姿を見たり、さらにはほとんど引つ切りなしに訪れる医務室での本市医療班の対応の手際の良さ、薬などを貰つてそこを出る避難者の落ち着いた姿に一時の安らぎを感じたことであつた。

#### ⑥ 神戸ヘリポート

本市航空隊の離着陸場所となつているポートアイランド内の神戸ヘリポートを訪問した。

発災直後の状況からだいぶ落ち着きを取り戻した様子で、離着陸するヘリコプターの頻度もそれほど激しくもなく、救援や物資輸送という緊急の活動より、災害視察や取材活動中心の基地となつていた。

たまたま本市消防局の航空隊は、当日午前中に引き上げた後だったので隊員の激励はできなかつたが、ヘリポートの所長等から横浜市の支援に対し、礼儀正しく丁寧なお礼を言われたのが印象的であつた。

#### 3 一被災地をこの目で見て

「大都市神戸を中心とする今回の直下型大震災による惨状は、全くこの世の出来事とは思えない。」と言うのが誰しもが受けた実感ではないかと思う。

神戸市内だけでも、市の中心的建物である市庁舎を始め、警察署、市民病院等の公共建築物を含む数多くの耐震耐火を誇っていた建

物が、無残な姿をさらしていた。

同時に鉄とコンクリートの塊によって、いかにも堅牢さを誇示していた鉄道、高速道路をはじめ、土地の一部として不動の重量感をもって構築された港湾の岸壁等の土木構造物でさえ、悲惨な形で大きな損傷を受けていた。

また、これまで一般に地震にも強いとされていた地中構造物としての地下鉄も、電気、ガス、水道、下水道等の地下埋設ライフラインと共に、随所で破壊され市民はもとより内外の関係者に極めて大きなショックを与えている。

加えて、人的被害を含め災害を大きくした密集市街地を焼き尽くした火災跡地を見るにつけ、五十年前のあの戦災による焼け野原の惨状を思い出させるに十分であった。

中でも無残に焼け落ちた店舗らしい手付かずの焼け跡に、犠牲者の冥福を祈るお花や供え物が各所で見られ、私はこの痛ましい現実の中で手を合わせながら、カメラを向けさせていた。失礼を詫言った。

今回の地震は、数百年の休眠を破って活動した活断層によるものといわれ、淡路島北端から神戸、芦屋、西宮と幅約一キロ、長さ三十キロにも及ぶ断層のずれが直接の原因と言われているが、それにしてもすさまじい自然のエネルギーが集中的に放出されたものだと驚嘆させられる。

地球物理学の次元で、地震そのものの学術的調査や研究も待たれるところではあるが、破壊された建築物や土木構造物等のいわゆる都市装置の耐震性について、今後どのような対策を講じていくべきかについて、この際土

木学会や建築学会等の全国組織を中心に、日本の衆知を集めて徹底した検討を早急に進めるべきであると思う。

それらの成果をもとに、できるところから改善を加え、これから進める復興事業にも生かす努力が求められている。

昔から「天災は忘れたころにやってくる」という諺があるが、日本列島における最近の自然災害を見ても決して「忘れたころ」ではなく、まさに「いつでも・どこでも」危険にさらされているといえる。

今まで我々は、日本全体を地震列島として頭では考えてはいても、その「万一」を具体的に想像して日常の行動に結び付けていた人は少なかったと思う。

しかし、この阪神・淡路大震災を目の当たりにした今日、我々は宿命的に「万一」の想定から「必然的前提」に切り替えた上で、個人や家族としての備え、隣近所など地域の連帯、そして行政・企業等の組織的対応、さらに国家的レベルでの総合的施策への展開をも含めた系統的かつ有機的な危機管理の在り方とその対策を早急に確立する必要があると思う。

今回の災害で、本市各局区の多くの職員が支援活動を通じて得た貴重な「実体験」を、二十一世紀に生きる我が横浜市及び横浜市民に対する貴重な教訓として生かしていこうではないか。

これからも引き続き震災復興事業等の支援に向かう職員をも含め、本当に「ご苦労様」を申し上げたい。

〈横浜市助役〉

阪神・淡路大震災の被害状況

